

令和6年度第2回さいたま市アーバンスポーツ研究会 議事録

- (1) 開催日時 令和6年10月24日(木) 9:30～11:30
- (2) 開催場所 さいたま市大宮区役所401・402会議室
- (3) 出席者 小林委員、佐藤委員(会長)、田中委員、松田委員、
増永委員(副会長)
欠席者 鎌田委員、久世委員
- (4) 議題 さいたま市の今後の取組について
- (5) 公開・ 公開
非公開の別
- (6) 傍聴者の数 0人
- (7) 会議資料
- ・ 次第
 - ・ 資料1 第1回研究会での主な意見及びさいたま市の今後の取組案
 - ・ 資料2 ルール・マナーの普及啓発チラシ
- (8) 議事内容
- ① 開会
- スポーツ文化局スポーツ部長より挨拶
- ② 議題
- さいたま市の今後の取組について
- 資料説明
- 事務局より、資料1に基づき説明
- 意見交換
- 【佐藤会長】
- 資料の左側が第1回の主なご意見、それに対して右側が「今後の取組案」となっており、こちらについてご意見いただき、さらに施策を考えていくとのこと。様々な要素が絡むので、項番は気にせず意見をいただきたい。また、今年度アバスポさいたまの実施が2回残されており、今年度に生かすもの、来年度に生かすものは事務局で判断されるが、その点も留意いただきながらご意見いただきたい。早速、順を追って進めていくが、今後の取組み案ということで、導線についてご意見はあるか。

【小林委員】

導線として、スクールキャラバン、アバスポさいたま、アバスポふらっと野田小、民間のスクール・パークとあるが、イベント実施ができる回数や、民間との連携がこれからということを考えると、裾野が広がる要素が乏しいと感じる。アーバンスポーツには、どこでもできるというメリットがある一方で、導線がこれしか示せないのは弱いと思う。市民の方々がアーバンスポーツを始めやすい環境づくりについて、まだまだハードルがあると感じた。

【田中委員】

アーバンスポーツに触れるという部分では、スクールキャラバン等の活動はすごく良いもの。まずはアーバンスポーツを正しく認識してもらい、さいたま市以外にも環境は増えてきていると思うので、そこに広がっていくという部分では、今の活動はとても良い活動だと思う。

【増永副会長】

大門上池調節池広場等乗れる場所はあると思うので、こういったところも含めて活動した方が良いと思う。

【松田委員】

スクールキャラバン等で体験した子は、初めて体験する子も多く、その後にいきなりパークに行くことは難しい。調節池等の何もない公園に休みの日に行って滑るくらいがちょうど良いと思うので、そういった場の周知や、月に1回のイベントの実施等の取組みができると人が集まりやすいと思う。

【佐藤委員】

導線に対して、各要素を広げていくという意味で太くするという考え方。それから、少し違う機会もあるので、そういったものも導線に組み込んでいき、導線を長くするという考え方。また、別の導線もあるのではないかとということも聞いている中で感じた。その3つの考え方で進めていけたらと思う。太くするということで、重点的に増やす部分として、例えば入口であるスクールキャラバンとアバスポさいたまのどちらを増やすべきか。あるいは、こちらを増やすとこういう良い点があるといった観点でも、ご意見いただければと思う。

【田中委員】

スクールキャラバンは、実際に訪問して見せるという点で、ある意味無理やりでも見せることができる。興味はなかった子でも、知ることができる。また、直接言葉で魅力を伝えられる部分がスクールキャラバンの強みである。アバスポさいたまは、実際に道具に触れ、一緒に汗をかくことができる点が魅力。そういった部分でそれぞれに違った良さがある。

【増永副会長】

スクールキャラバンについて、例えば昔からやっている交通安全教室等のように広がっていけると良いと思う。

【小林委員】

資料に、児童数が少ないところではできるスポーツが少ないという部分があるが、これはスクールキャラバンではなく放課後学習の話として私が前回お話ししたもの。生徒数が少ない学校だと、放課後学習のメニューが限られているので、アーバンスポーツで呼んでくれることが多いという話であった。

冒頭意見した部分で一番気になっているのは、地元の担い手がどのぐらい育っているのか。やりたい子たちが増えてきて、場所はいくつかあるとなっても、地元で誰が普段から面倒見ることができるのかが見えていないように感じる。スクールキャラバン等のイベントを、日常的なもの、日頃から親しめるものにどう繋げていくかが大事だと思う。教えられる人を増やしていくために、アバスポなどの取組みから結び付けていかないと、結果としてイベントをやっただけで終わってしまうことを危惧している。太くする、広げるときにはここが大事だと思うがさいたま市の現状についてお聞きしたい。

【事務局】

民間でスクールをやっている方等と繋がりはまだできていない。今後、市の方向性と合致する民間事業者を探していきながら、日常に落とし込んでいく取組みを考えていきたい。

【小林委員】

田中委員がおっしゃった、スクールキャラバン等で体験した子が施設に遊びに来てくれたというのは、そうあって欲しい一番の形だと思う。ただ、田中委員は施設を持っているが、例えば松田委員なんかは、体験会でインラインスケートを教えているが、今後やりたいと言われると、えっと、となってしまうのではないか。取り組んでいる人等によって導線が変わってしまうとなると、なんで普及活動やったのとなってしまうので、その情報整理はしっかりやった方が効率は良くなる。

【田中委員】

アーバンスポーツのよい認識を広げる普及活動と、ハードを作っていくことは意外と別々だと思う。茨城県の境町では、パークがすごくできているが、そのエリアにはそんなに人がいない。環境ができたので、外からおいでという状態。よい認知に繋がる活動と、物を作るのはまた少し違う。広げるという部分では、今のこの活動はすごくいい。

【小林委員】

境町は、シティプロモーションでアーバンスポーツを題材としている。スポーツ実施率向上等のスポーツ施策としてのアーバンスポーツというと、境町の取組とは違ってくると思う。今後のハード面を整える際に大事なことは、その地域で施設を欲している人がどのくらいいるのかということ。施設は作ったけど利用者がいなかったらスポーツ実施率は向上しない。ここに作れば任せられる、広げてくれる人がいて、その人が欲して、仲間を集めてコミュニティができるから場所が必要という流れが正しい筋道だと思う。市も、やる気がない人のところに施設作って押し付ける訳にもいけないので、先に人がありきだと思っている。さいたま市にどのくらい担い手が増えてきているのか。その方たちに、ルール・マナーや協力の形を知っていただき、指導者としてレベルが上がっていけば、市としてもお願いできるものが増えてくると思うが、その種がさいたま市にどれくらいあるか。

【佐藤会長】

イベントの回数だけではなく、人を増やす、その人というのは参加だけではなく、参画でしょうか、企画・運営等に関わってもらえる人を増やす、可能性のある人を見つけ出すことが、太くするために必要ということだったと思う。後ほど出てくるが、ショップやパークとの協力というところが、その1つの方向性になると思う。もう1時間ちょっとしかないので、次に移って

いこうと思う。スクールキャラバンの取り組みについて、ご意見はあるか。すでに出たものとしては、人数が少ない学校でスクールキャラバンを、という意図ではないということなので、ご注意いただきたい。また、学校であるので教育的な事業と連携しやすく、教育効果が高まるというお話があった。あとはルール・マナーに関し、一般的な自転車の乗り方という方向をいい意味で発展させると、学校でやる意味も理解いただけて、広がっていくのではないかといったお話も出ていたと思う。プラスアルファでも肉付けでもよいがいかがか。また、各小学校で子どもが持っている端末を使ってアバスポさいたまをPRするということなので、こんなコンテンツを入れるといいのではないかといったご意見もいただけたらと思う。

【田中委員】

スクールキャラバンを実施する小学校はどのように決めているのか。同じ学校で複数回実施することは、いいこともあるが、なるべく今まで行ってないところでの実施も考えられると思うが。

【事務局】

スクールキャラバンからアバスポさいたまの流れを意識し、アバスポさいたまの会場近隣の小学校・保育園で実施している。実施可能な回数が限られているため、こちらからアバスポさいたま会場の近隣小学校・保育園に個別に声をかけている。アバスポさいたまは、今年度はこれまでに実施していない地域での開催を調整している。関連してスクールキャラバンも、同じように実施していければと考えている。

【田中委員】

アバスポさいたまの会場からの距離感は気にせず、外側で実施することもよいのかなと。アバスポさいたまに興味を持った子が、外から集まっていることに対して、近くの人たちが気にするという図式もある。

【松田委員】

端末を使ってアバスポさいたまをPRするという点について、平仮名表記になっている等、小学生向けになっているか。

【事務局】

現状はまだ1人1台持っている端末に広報として載せてはいない。教育委員会と調整し掲載できるようになれば、アバスポさいたまやルール・マナーの部分も小学生に向けた内容として掲載できるのではないかと考えている。

【佐藤会長】

スクールキャラバンの回数が限られてしまうという点について、予算なのかやってくれる講師がいらないのか、回数を増やせない要因はどちらかというところにあるか。

【事務局】

民間との連携が進んでいけば、講師としてお願いすることもあるかと思う。

【佐藤会長】

協力してくれる団体あるいは人を、参画者として取り込んでいき、同士を増やしていくことが全てに共通する課題だと思う。

学校関係の話になるので、特定の競技的な自転車の普及だと、教材として取り扱われてないので、学校側は首をかしげてしまうと思う。学校に入っていくためには、日常の中での教育効果・道徳的な効果を伝えるコンテンツや、

アーバンスポーツ特有の幅の広さで、学校の教材として扱われているけん玉やダブルダッチ・縄跳びを普及のための手段として、ウエイトを変えていくということも必要なのかなと思ったところ。

一般的な自転車のマナー教育に結びつけることができたらいいいと思っている。また、地域によると思うが、公園を使った遊び方というのは、アーバンスポーツだけではなくて、サッカーや野球等の遊び方に通じるところがあるので、できるだけ子どもの日常の一般的なルール・マナーに広げたところでコンテンツを作って、教育的な効果があると学校に入っていければと思う。

1つ質問を投げかけるが、導線の課題について、例えばアーバンスポーツをできる場所が他県にある場合、市と他の県や市が、公式な協力関係というとかかなりハードル高いと思うが、例えば非公式で、できる場所として市の範囲を超えて紹介していくということはどうなのか。こちらが勝手に紹介できないなど、少しステップが必要なものなのか。

【事務局】

まずは、市の中でどこにアーバンスポーツができる場所があるかの周知が必要だと思っている。一方で市境に住んでいて、市外のできる場所が近くにあれば、その場所を周知できることが理想だと思う。施設の管理者・設置者が違えば、それぞれの事情等があり、ネットワークを広げていくことがすぐには難しいという中では、まずはさいたま市内の市として責任持って推薦できる場所を周知徹底していく必要があると思っている。

【佐藤会長】

非公式な参加者同士のコミュニケーションの中で、広がっていくこともあると思う。

松田委員からあったが、アバスポさいたまのPRの方法と内容について、SNSあるいは端末を使ってどのようなPRをすれば、こういったことを子どもに伝えたらいいのではないかという部分について意見はあるか。

【小林委員】

コンテンツからはずれてしまうが、子どもへの情報の与え方で危惧しているのが、現在のネットの情報量で言うと、ストリートに出ている等、市が望まない方向性の情報の方が多い場合がある。それを見て、ストリートへ出ようとなってしまうと、市のやりたい方向性とずれてしまうので、情報発信の仕方は考えていかないといけない。

【佐藤会長】

寝た子を起こすという感じになってしまう場合があると。

【小林委員】

ストリートに出てしまっている子は、小・中学生の低年齢層の子が多い。ストリートに行こうと誘う大人がいたりして、良し悪しが分からないままストリートに出て、裁判沙汰になった等の事例が全国で起きている。関連のお話で、静岡市の服織小学区でスケートボードが問題になり、学区全域スケートボード禁止と学校が出した。その、禁止になる前の夏休みに、今問題が起きているから、アーバンスポーツに興味がある子に対して、夏休み前にお話がしたいという相談がきた。結局、授業で時間が取れず中止となったが、子どもが夏休みにアーバンスポーツにチャレンジしようとなったときに、ルール・マナーを一緒にお勉強としてやることもいいと思う。夏休みの過ごし方として、例えば田中委員や松田委員に来ていただいて、ルール・マナー等の

話をしていただければ、教育的な価値も高まるし、学校としても、危ないだけではないことを分かってもらえると思う。

【佐藤委員】

うかつな情報提供をすると危ないということ。もう1つ、スクールキャラバンの時期で、夏休み・長期休みに繋げるというところも検討をという意見だった。3番目のアバスポさいたまについて、特に今年・来年と区切らないが、その辺も含んだ意見をいただければと思う。まず、周知の方法について、市の案のほかに、あるいは、全く観点違っていいが、いかがか。

【田中委員】

インスタグラムのアーバンくん等、今あるものをもっと活用するのが良い。アバスポさいたま等の告知と事後報告だけでなく、もっとデイリーに、例えば必ず週2回掲載するとか。イベントがない期間とかも、ルール・マナーについて、1つずつ発信していくとか。そういったことがとても大事。イベント時は、QRコードを用意して、「イベントの写真やルール・マナー等について発信しているから、みんな入ってね」と保護者に促す。アーバンくんが始まって、フォロワーが今500名ぐらい。すごく大きい数字だと思う。アーバンくんを通して伝えられることはもっとある。ルール・マナーについて問い掛ける投稿をしたら、うちではこういう問題があって、とダイレクトメッセージが来るかもしれない。もっと活用した方がよい。大変だとは思いますが。

【佐藤会長】

直接のPRだけでなく、相互交流も使って、間接的なことを情報発信しながら、両方に効果をもたしていくと。ルール・マナー等の関連のお話を入れていき、膨らましていく。

【小林委員】

キメラさんのイベントでもスクールキャラバンでも初期からそうだが、イベントの後を大事にしている。そこで行われたことや子どもの笑顔等の写真や動画を出すと、みんな見ている。映像が格好良ければ、うちにも来て欲しいとなる。告知はもちろん必要だが、そこで楽しんだ子または親が、見たくなる仕掛けがすごく大事。ただ、田中委員もおっしゃった、大変だと思いますという部分が、運用上すごく難しいところ。特に行政の場合、担当者の異動等により、情報発信のペースも質も変わってしまうことがよくある。そういう部分でも、地元の協力者・参画者を増やすことができれば、例えばその参画者の方にアーバンくんをメンションして投稿してもらい、後はそれをシェアするだけという形にすれば、プラットフォームができて情報の幅も広がる。今実際に見ているが、インラインスケートの講師の方が、体験した人向けに、このあとこういうチャレンジしたらいいよといった内容のもの載せる等、ところどころいいものはある。それに継続性がなかったり、体験している写真があまり楽しそうに見えない感じだったりするので、せっかくいい現場を作っているのだから、内容次第でもっとフォロワーを増やせると思う。

【佐藤会長】

広報+周辺のことで、相乗効果を上げていくということだった。あとは、さいたま市は様々なスポーツイベントがあるので、これらの中での相互発信も考えられる。今のお話だと、開催されたことの広報であっても、次回に繋がっていくと感じた。来年参加してください、その前に一緒にルール・マナーを考えてみませんかといった広がりかもしれない

【小林委員】

終わったイベントの告知の画像は消したほうがいい。古い情報がそのままだとメンテナンスしていないように見える。代わりに終わったイベントの魅力的な写真・映像をあげていく。

【田中委員】

アーカイブに入れておけば、復帰もできるし、消えはしない。

【松田委員】

写真投稿の許可はもらってから参加してもらっているか。

【事務局】

参加規約に、写真を広報で使わせていただく場合がある旨を記載しており、そちらに了承された上で参加いただいている。

【佐藤会長】

やはり懸案は、重要課題であるパークやショップとの連携か。関わってくださる方を増やすということで、市としては一斉に募るのか、目途をつけて声をかけるのか。

【事務局】

研究会より、民間のショップ・パークとの連携について、さいたま市の考え方と合致するところと組むべきというご示唆をいただいている。さいたま市としてはどういう条件・考え方を持つのか、考え方の整理が重要。まずは考えを整理しつつ、同時に、いろいろなショップとも絡みはあるので、まずはご縁のあるショップに対して、ご協力がいただけるかどうか、さいたま市の方針と合致するかというところをすり合わせる作業をしていく。

【佐藤会長】

協力者を少しずつ探していくが、どんなことに協力してもらえるのかいうのも重要な課題。この協力事項は外せないといったポイントはあるか。

【田中委員】

いい協力体制になったショップ等の近隣で体験会等が行われたら、すごく嬉しいこと。小学校等とのパイプがないので、前向きに取り組めると思う。ただ、人材として適切かどうかというところは必要で、日々の活動や価値観によっては、連携は難しい。また、どういう話ができるのか、どういう教え方ができるのか。最初は、インラインだったら小林委員が何回か一緒に行くとか、そういった指導が必要になるが、この競技を良く認知してもらうための協力に、賛同するかどうかというところが1つある。

【佐藤会長】

地域の拠点になってくれる意思があるかというところ。協力者を探す意味では、人選が大きな課題。人選の方法として、ご意見をいただきたい。

【小林委員】

バックボーンがまちづくりとかコミュニティーの専門なので、その中で話をさせていただくと、最初から100%を満たす人材がその地域にいることはありえない。少しでも協力するという気持ちがある方と関わり、相互理解を深める中で市の立場を理解いただき、だんだん協力者になっていっていただく、協力してもらえる範囲を増やすといった形で育てていくしかない。例えばさいたま市内でのアーバンスポーツイベントについて、市民の方の意見

も聞きたいので、一緒にワークショップやりませんかと開いてみて、来てくれた人たちを核にして広げていくというやり方はすごくシンプルで、そこから育てて広げていくという方法はやりやすいのではないかな。

【佐藤会長】

選ぶのではなく、育てていくということ。

親が参加しやすいかということも、アバスポでは大きな課題になっている。何か工夫があればご意見いただきたい。

【田中委員】

子どもが興味を持って乗ることになった後に、「今日は大人サイズもたくさん余っているからよかったら乗ってみませんか」という導線が一番よい。最初から親子で参加とすると、親は構えてしまう。そういうつもりじゃなく来て、結果的に乗ったら楽しかったということがすごくある。親も一緒に楽しめる内容にして、親が参加する形はすごく良いこと。理解も変わらと思う。

【佐藤会長】

最初から親子にこだわらずに、子どもターゲットに保護者を誘ってみると。

【小林委員】

体験会をやったときに、親に手伝っていただいた。親子体験教室だけでも、2人とも体験するのではなく、親は子どものサポートをしてくださいと。親に教え方を覚えて帰ってもらう。担い手の部分で苦労するのは、教えられる人がいないこと。インラインスケートの体験会やスクールを見ると、先生が全部仕切って、親は外で見ているということがある。教え方を覚えて帰ってもらえれば、「おうちでもできますよね」と、継続するきっかけになる。親を積極的に巻き込まないと、子どもは運動を続けられない。そこがすごく大事。

【佐藤会長】

子どもを主にして親を誘い、親は子どもをサポートする形で関わると。

そのアバスポさいたまのPRの方法ということで、イベントそのものに関するPRと、ルール・マナー等に関するPRという2つがあるというところで、何をどうPRするか。さっきのところにも通じるが、主たるものだけではなく、周辺的な内容で情報発信の機会を増やすという点で、アーバンスポーツの効果やメリットについて、発信する内容のご意見をいただきたい。

【小林委員】

子どもについては、体幹トレーニングになること、幼年期に取り組むことで、どんなスポーツをやるときにでも手足の動かし方を覚えるといったところ。その後のスポーツに関することや、大人になったときに幼年期に経験したスポーツを再開する傾向があるので、選択肢に入れておくといいと。お母さんとかに勧めるときは、シェイプアップ効果を言う。有酸素運動であることや、腰周りとかウエスト等を絞れますよと。視覚的な運動効果を言ってあげるといい。

【田中委員】

加えて、このエリアでスポーツ実施率が上がったとか、何歳ぐらいの人が楽しんでいるとか、数値的なところも時々盛り込んでいくと、取組みの内容が周知される。アンケートの内容の抜粋とか。そういったものがあるとよいと思った。

【松田委員】

あとは、友達ができたとか、人間関係の部分。

【佐藤会長】

キャンペーン的に同じテーマがしばらくあったほうがいいのか、ランダムにいったほうがいいのか。

【小林委員】

ジャンルが複数ある難しさはあるが、まずは、会長がおっしゃったことに悩むほどコンテンツを充実させること。

【佐藤会長】

同じようことが何回出ても悪いことではない。

【小林委員】

情報発信で言うと、必ず集合写真を撮っている。松田委員がおっしゃったみたいなお友達できたとか楽しそうな写真。集合写真を撮ると、いろんな年代の子がいることが伝わる。あとは、競技スポーツをやってみたがどれも合わなくてアーバンスポーツに取り組む子が多いが、そういう子たちは、下手でも楽しんでいる映像を見て、このぐらいでも来ていいんだと思って来てくれたりする。まずは、楽しそうにしていることと、しっかりやっていることが分かれば、行ってみようかとなる。使うSNSと、来る人たちの動機づけについて整理した上で、出す情報を精査した方がよいと思う。

【佐藤会長】

確かに、こんな効果があるというのと、押し売りっぽくなるかもしれない。

4番目のアバスポふらっと野田小プールの件。ショップ等との協力については、もう話が出ているので、道具の問題について。事故発生の際の補償問題等、ケースバイケースで一概には言えないところだが、置く方向での課題について、ご意見いただきたい。

【田中委員】

市が管理して道具を揃えるのは、リスクが多いと思っている。安全な使い方ができるか。メンテナンスも定期的に必要になってくる。指導者がちゃんと装着してあげられる状況がいいと思うので、その都度のレンタルや、講師が持ってきて開催できるような内容で進めた方がよいと思った。

【佐藤会長】

協力してくれるショップがあれば、そのショップにここで講習会をやらせてあげるといって少し乱暴だが、そのようなイメージか。

【田中委員】

ショップで体験用のギアを何セットか持ってきて、講師と一緒にやってくれる等の形がよいのではないかな。

【佐藤会長】

道具を持っていない方も、そこで体験できる形。道具を持っている人が管理をした上で、提供する状況を作るしかないのかなと。レンタル用を市が持つというのはリスクが高いということ。

【田中委員】

それで怪我が出た例もあった。

【佐藤会長】

そうすると、講師の面もクリアとなる。問題は、市に協力してもらえるかどうかというところ。一旦、当面は貸出の道具を置くのは慎重に考えた方がいい。

【田中委員】

無人貸し出しみたいなものは危ない。

【佐藤会長】

野田小のプールで、ショップに講習会をやっていただくという使い方は、市として問題はあるか。

【事務局】

どういう規定に基づいてお貸しできるかどうか、そういったところの確認をしないといけない。

【佐藤会長】

主催をどうするかによって変わってくると思う。ショップ主催の講習会なのか、市がショップに依頼して講習会をやるのか。現状ではやはり物を無人で置いておくことは避け、ショップに協力いただいて、その人が見ている中で使っていただく。持ちつ持たれつでないと、長続きしないということがあると思うので、お客様を獲得する機会として提供していく。

【小林委員】

ショップにやらせてみるどころの初期段階では、安全管理とか転び方は必ず指導してくださいと。ここを使う以上、こういう教育をするようにと、市側からリクエストとして挙げることが大切。慣れてないショップがやりたいとなったら、そのリスクヘッジは市側からしてあげたほうがいい。

【田中委員】

まずは市のイベントとして、アバスポふらっと野田小プールでの体験会をショップに協力してもらう形でスタートして、築き上げられるものがあったら、さらに発展してもいいかと思う。

【小林委員】

現場の積み重ねで、市の価値観とか、ルールをショップに理解していただきながら、いずれ自分たちでやっていっていただくという形がいいと思う。

【佐藤会長】

導線のところで、野田小プールはただのできる場所だったが、道具を持ってない人もできるような機会としても使えるということ。そうすると5番のパーク・ショップとの関係は、ほぼ今までのところだと思う。資料の＜内容＞に関して、ストリートでやった場合のリスクなどというところで、根本の方法として、ショップに協力してもらうチャンネルはどんなものがあるか。

【小林委員】

アスリートの親御さんが知りたがっているのが、事故・事件の事例。賠償が発生した事例が全国にある。地方ごとにニュースになって詳細が出ていたりするので、情報収集はそんなに難しくないと思う。法的に確かではないものを出すことは問題。実際ストリート出て、こういうことがありましたという事例紹介資料としてあげると。

【佐藤会長】

ラフな情報発信ではなく、むしろ古典的なホームページみたいな感じで重々しく。結構影響が見えるかもしれない。

【小林委員】

学んでもらう資料としては一番説得力ある形。ストリートに出る大人たちは、間合いみたいなものを分かっている。一方で、今の子どもたちは、過激派みたいな子が出てしまっている。そういう子どもたちは、親に危機感を持ってもらうしかない。そういう意味では、親が心配になるような、罰金いくら、というものが材料としてあった方がよい。

【佐藤会長】

最後、ルール・マナーの普及啓発について、ここだけでじっくり考えなければいけないが、今日の段階でということにしたい。＜方法＞ということで、SNS・子どもが学校で持っている端末等でルール・マナーを普及する形で、親としては裁判の情報等が気になっているはずなので、そこからいい意味で親子の教育を促して欲しいということかと思う。効果として、トレーニング的な効果、地域づくり、子どもの心への効果、そういったものをゆっくり積み重ねていき、作っていく。協力者が増えてきたら、うちの地域ではでこんないいことがあった等の情報を集積していく場所として、SNSも活用していくということになるかと思う。最後の啓発の考え方で、地域性とタイミングが、テーマになってきたと思う。タイミングについては、今日は子どものことを考えると、長期休みの前という1つの観点が出ていた。地域性やタイミングへの配慮・工夫という点で、最後この1点で終わりにしたいと思うが、意見はあるか。

【小林委員】

地域性を考えるときに、誰を考慮するのかということ、地域に住んでいる人。スケーターはみんな移動していく。怒られない、やりやすいところに移動していく。実際さいたま市の中でも禁止の看板が立っていたりとか、私も研究会の度にガイド見ながら歩いたりするんですけど、もう実際に損害を被っている民間の敷地や施設がある中で、絶対駄目だという大人もいる。その方たちとどう歩み寄っていくのかということを実に見つけないといけない。地域性をこちらだけで考えるよりは、その地域に溶け込んでいって、何かしらイベントやるなり、機会を見つけて心配な部分や問題があるということ聞く等、丁寧にやっていかないと、受け入れてくれるところの心配とか、モヤモヤを抱えたまま始まっちゃうと、それで止まってしまうことがあるので、そこは丁寧に。

【佐藤会長】

問題が起こり始めているところを少し意識していく。

【小林委員】

問題が起きているところから取り掛かる。

【佐藤会長】

未然の防止よりも、すでに問題が起きているところをターゲットにしていくと。そうすると、問題が起きているところの小学校あたりでスクールキャラバンを実施することも一計かもしれない。

【小林委員】

本当は配慮した方が。アーバンスポーツをやりたい側が受け入れていただく側なので、こちらから歩み寄っていくことが必要。

【佐藤会長】

タイミングとしては、夏休みの前とか。この数年間、イベントの実施が比較的秋になっているのは、準備の関係か。

【事務局】

場所や講師の手配の関係や、近年夏休みはかなり気温が高いため、基本的には屋外で実施するためことも踏まえると、秋になるケースが多い。

【佐藤会長】

比較的学校の体育館は冷房が入っているので、もしかしたらスクールキャラバンは、夏休み前も可能かもしれない。

【事務局】

学校によって冷房があるところと無いところがある。また、アバスポさいたまをいつやるか、スクールキャラバンの次の案内として考えると、という部分がある。

【佐藤会長】

アバスポとスクールキャラバンの連携というところで、アバスポは屋外で実施するため秋の開催になり、そうするとその前にスクールキャラバンといったところ。学校の端末を使った情報発信で、直接的なイベントの告知だけではなく、ルール・マナー等の周辺的なことを夏休み前あたりに発信し、秋に繋げていくという連続性もあるかもしれない。最後ちょっと急いでしまったが、大変有意義な議論ができたと思う。

以上をもって、本日の議事を終了する。

③ 閉会

(9) 問合せ先 スポーツ文化局スポーツ部スポーツ政策室
TEL 048-829-1737
FAX 048-829-1996